

千歳神社とその歴史

金 沢 恵 理

札幌市立星園高等学校講師

はじめに

千歳市街を見下ろす真町の高台に位置し、うつそうと緑が生い茂る鎮守の杜に守られて鎮座するのが千歳神社である。この神社は、千歳市民にとっては七五三の厄払いや結婚式、また九月の例大祭などで非常に馴染み深いものがある。この千歳神社は地域の拠りどころでもあり、ある意味では千歳の歴史とともに作ってきたといっても過言ではないだろう。本稿では、この千歳神社の歴史を、これまでに千歳市が刊行した『千歳市史』、『増補 千歳市史』の記述を参考に概観したいと思う。



写真-1 千歳神社

一 千歳神社の創建

現在、千歳神社本殿がある辺りは、擦文時代の遺跡やアイヌのチャシ跡が発見され、千歳神社の近藤勝人名誉宮司は、裏参道の女坂をシコツ十六場所の一つ「ろうさん」（路下る、この場所から川や海に抜けていくの意）というアイヌ語地名が残されているとしている。このあたりは千歳川の近くでサケもよく獲れ

ていたことから、昔から住みやすい土地であったと考えられる。

千歳神社の始まりは、江戸時代の享和三（一八〇三）年にまでさかのぼる。当時、蝦夷地は幕府による直轄が始まったばかりであり、勇払勤番の箱館奉行役人であった高橋治太夫によって、シコツ河（今の千歳川）に

「正一位思古津稲荷大明神」が勧請された。高橋治太夫がなぜここに稲荷社を勧請したのかは明らかではないが、これが現在の千歳神社の始まりとされている。⁽¹⁾しかし、その約五十年前の万治元（一六五八）年に弁財天小社を造ったとの記録が『福山秘府』（北海道庁『新撰北海道史』第五巻史料一、昭和十二年）⁽²⁾にあり、万治三（一六六〇）年にはご神体が安置されたと述べられている。この弁財社もどのような経緯で建てられたかは明らかではないが、弁財社の多くが漁業の安全など水に関する願いを込められたことから、千歳最初の弁財社もそのような理由から建立されたのではないかと予想される。

二 弁天社と稲荷社の文献記録

弁天社と稲荷社の二つを比べたとき、より煌びやかで目を引くのは弁天社のほうだったようである。千歳（シコツ）は、蝦夷地の中でも特に重要視された交通路にあたる土地であったため、千歳について記された文献はいくつもあるが、その中でも、文化年間に津軽藩士であった山崎半蔵が千歳に立ち寄り、弁天社の煌びやかな様子を書き留めている。



写真-2 「ろうさん」の碑

辯才天ノ社アリ 五間四面ノ拝殿三間四面ノ奥院ハ金具惣減金 日光上野ノ堂塔ヲ拝スルガ如シ 陰二正一稲荷ノ堂アリ 二間四方ノ拝殿四尺方計ノ奥院

（「山崎半蔵日誌」、『千歳市史』より引用）

山崎半蔵は、江戸幕府の第一次蝦夷地直轄に際し、文化元年から五年にかけてムロランやエトロフ島、ソウヤなどを警備した津軽藩士である。この「山崎半蔵日誌」はこの間に書かれたものであるが、弁才天の煌びやかさに対し、稲荷社の方はその陰にあると記し、当時は稲荷社よりも弁天社のほうが立派であったことを伺わせる。文化五（一八〇八）年の『東蝦夷地各場所様子大概書』には、

千年川弁天社は文化二丑年新規相建、其外同所稲荷社 勇武津弁天社等は前々より有之也。

とあり、文化二（一八〇五）年に弁天社が新築されたとある。⁽³⁾ これを行ったのは、当時の千歳（シコツ）の属していた勇払場所の請負人山田文右衛門であった。またここには稲荷社のことも触れている。前者の稲荷社は現在の千歳神社を指すが、もう一つの「勇武津弁天社」は、現在苫小牧市勇払にある恵比寿神社とされる。⁽⁵⁾

三 松浦武四郎と千歳神社、由波利権現

幕末の探検家松浦武四郎が蝦夷地を調査した際も、千歳の弁天社に立ち寄った記録がある。武四郎は六度にわたって蝦夷地の探検を行ったが、四度目の、幕府役人として安政四（一八五七）年に調査した報告書であ

る『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌（下）』（高倉新一郎校訂・秋葉実解説）の中の「志古津日誌」では、シコツトウ（支笏湖）の見分を行うために陰暦七月十五日に千歳を出発している。⁽⁶⁾ この『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌』は、アイヌが幕府役人によってどのようにひどい仕打ちを受けているかなどをも記していたため、出版されることはなかった。武四郎が出発するその日はあいにくの雨であり、少し滞留してからの出発となった。折からその日は弁天社の祭礼であり、武四郎も弁天社へと参拝に行くこととなった。

十五日 雨。滞留。今日は弁天社祭礼の由に附、一同此辺の土人等雨をおかして弁天社へ参詣。依て支配人覚造より我にも参詣致し呉候様申に附同道にて罷出候。扱左候所、小豆飯を一椀づ、女の子・子供等え社前にて遣し候間、其え一人前針一本づ、を我も添遣し候処、六十五六本入候（ひ）しが、当所の土人等一同大に悦びたり。依て我も酒二升を土人へ遣したりけり。

扱、社前へ拝せし処正殿は弁才天女、傍に龍神の厨子有、右の方の前に由波利山大権現の額有。よつて其を支配人に尋しかば、何時の頃よりかはしらざりしが、由波利山の権現とて（此処に）一軀野霊像有る由申侍りけるまゝ、是を開扉して拝するに、上に図する如き鉦作りとも云べき、上に図する如き木像なりけるが、実に其像霊有る也。如何にも威有て何となく尊とく覚え侍りけるが、額拝したる儘思えらく、我此霊像を拝せんと思ふこと年久敷けれども、由波利の嶺に在すごとく聞侍し儘、此度も麓まで行、心なくも縁を結ばで下り残り多きよと覚え居りしに、今朝の白雨にて不図も一日の滞（留）をして爰に結縁を致せしこと、是ぞ大悲の妙智力もて降し玉ふ処の、彼洪瀑澍大雨とも云なるかと感じ、是ぞ社殿の傍に没性し玉ひしが此世に霊光を輝し玉ふ時哉と、其忝さいわんかたなく、如此霊有御尊躰、何卒千島の土人等

が支配人・番人等（の為に）罪も無に辛き目に逢、此難を何卒して妙智力もて救ひ玉へと念じ候より外なかりしが、其像観音とは申せしも何像やらん。螺仏の様子大日如来かと我は覚え侍りけり。

武四郎は、雨で滞留したのを機に弁天社祭礼に参詣する。今まで念願だった「由波利（ユウバリ）山大権現」も拝むことが出来たとしている。この権現は円空の作とされている。円空は鉋で彫ったため、その荒々しさが作品の特徴でもあるが、現在では、円空の作品にしては端正でありすぎるなどの理由から、円空の作品ではないだろうとされている。だが武四郎も述べている通り、その仏像は実に靈驗あらたかな仏像であったという。武四郎はその後、役人を辞めて執筆活動に入るが、文久二（一八六二）年に『夕張日誌』を出版し、そこでも弁天社について、三十余段の石階段を上ると左に八大竜王、右に円空の鉋作の像を安置しているとの記述がある。⁽⁷⁾

四 弁天社の移動

さて、少し時代は飛ぶが、明治元年四月九日、維新政府は神社の社僧・別当に還俗を命じ、神社が仏語を神号とすること、仏像をご神体とすることを禁止する「神仏判然令」（同四月二十日）を出し、それまで境界が曖昧であった神道と仏教の分離に取り取り掛かっている。これは明治政府が神道を国の宗教とする方針を固めたからであるが、この流れは勿論北海道まで押し寄せ、千歳地方も明治五年に開拓使によって調査を受けた。このとき提出された預書を見てみよう。⁽⁸⁾

一、神靈

三

志古津稻荷

式ツ

漁太稻荷 式ツ

一、毘沙門 木像 壹

一、妙亀 身軀 壹

一、法鯨 木像 壹

一、法鯨 身体 壹

一、夕張観音木像 木像 壹

一、金勢鉄像 壹

一、鰐口 壹

以上

右者今般神仏混淆二付御廃正被 仰付一同承伏仕後日御沙汰次第札幌表江上納可仕候依而御預書奉差上候 以上

壬申十二月五日

千歳郡漁場駅場兼

山田文右衛門代

石山専蔵

勇弘千歳白老郡兼

神職 榊 永直

明治初期の千歳の神社にどのようなものがあつたかがわかるが、神靈としてある「志古津稻荷 式ツ」とは、前述の弁天社と稻荷社を指す。⁽⁹⁾「漁太稻荷」とは、現恵庭市にあるものである。弘化三（一八四六）年に松浦武四郎が蝦夷地を訪れた記録をまとめた『再航蝦夷日誌』には、

イサリブト 従ツイシカリ十一里。此処漠々たる曠野にして処々此辺沼有、又

枝川も網を曳けり。沼は左右に有て到而湿深きところ也。此処に到り四面とも山と云は少しも見ることなし。蔵の屋根え上らばシコツ山見ゆる也。番屋大きく建たり。弁天社、蔵々有。チトセ支配所也。

とあり、ここに弁天社があったことが記されている。^(a)その後、イサリブトの方は山田文右衛門が千歳から稲荷を分霊したとされ、もとあった弁天社と合祀されたようである。^(b)一方、千歳にあった弁天社は、その後カマカ（釜加）という川下の地へ移されることになった。

前述の松浦武四郎『再航蝦夷日誌』では、

カマカ 従イサリフト番屋三里と聞り。此処湖水の傍にして茫々たる見通しなり。西南シコツ嶽、東北にユウバリ嶽見ゆる。湖水の岸皆川柳、蘆荻繁茂し番屋壱軒有。此処へ上陸して中飯する也。弁天社有。蔵有。夷人小屋有。土肥沃にし而野菜もの能出来たり

とある。カマカは、新保清次郎が明治中頃に千歳の弁天堂から釜加へご神体を移し、釜加神社となったとされる。^(c)こちらにも以前から弁天社があったと記録されているが、イサリブトと同様に合祀されたものと考えるのが妥当であろうか。

この釜加神社には「釜加神社弁財天御厨子」という、釜加神社の弁財天が安置されている厨子があり、裏面の銘文には「シコツ」から「千歳」への地名変更の由来が記されている。この厨子は高さ三六^(d)、幅三三^(d)、奥行一六・五^(d)、表面全体が胡粉下地で固められて、黒漆を塗り、裏面は胡粉下地に銘文が彫られて沈金が施してある。この銘文によると、「シ

コツ」とはもともとアイヌ語で「大きくなくぼみ、凹み」の意があるが、「死骨」に通じる響きが良くなかったため、文化二（一八〇五）年、この勇払場所を担当していた支配人山田鯉兵衛嘉充より箱館奉行羽太正養に名称を改めたいとの要請があった。たまたま鶴が多く生息していたところから「鶴は千年」の古事より「千歳」と改められたという。もともとはシコツ川という川の名前の千歳川への変更であった。昭和四十六年九月十六日、千歳市はこの厨子を最初の千歳市指定文化財に指定した（千歳市文化財保護条例の制定により、昭和五十二年四月二十三日に再指定）。

五 明治以降の千歳神社

幕末の動乱期を経て、江戸幕府に代わる明治新政府が誕生すると、宗教政策の基本方針として神道が定められることとなり、それまで曖昧であった神道と仏教の分離政策が全国的にすすめられた。北海道もその例外ではなく、明治二年には北海道開拓を進めてゆくために開拓使が設置されていたが、その開拓使の調査を受けることになった。明治五年九月三日、北海道で神社改正が布令され、函館八幡宮神主から札幌神社権宮司になっていた菊池重賢が、同年二月北海道神社御改正取調掛兼務を命ぜられていた。菊池によつて進められた北海道の神仏分離の基礎調査は、同年七月の小樽郡銭箱村を皮切りに始められた。^(d)千歳では同年十二月に菊池が調査に訪れ、三年後の明治八年、開拓使民事局より社格が示され、ここに稲荷社は郷社として認められたのである。このとき主祭神を豊宇氣比売命とした。

さて明治六年になると、函館から室蘭、札幌を連絡する札幌本道が新設され、札幌や根室までの道はそれまで勇払を通っていたのだが、苦小牧を分岐点とすることとなり、勇払村は徐々に活気を失い始め、それま

であつた役所も苫小牧へと移ることとなった。それにともなつて勇払村にあつた神社も荒廃してきたため、龍神社のご神体を千歳へと移し、祭器なども同様に千歳へ移されることとなった。『苫小牧町史』では、これを移したのは当時勇払場所の支配人であつた山田文右衛門の親類であつたとしている。現在千歳神社には山田家寄進のものが伝えられている。

明治十四年には、明治五年より始まつた開拓使十年計画がもうすぐ終わるために、拓殖の実情を見ようということで明治天皇が北海道を巡幸し、九月二日に千歳で宿泊することとなった。その際、千歳神社が避難所として指定されていた（このときは「龍神社」と呼ばれた）。明治三十四年か三十五年には神社の百年祭を行つたとの記録もある。

大正六年八月二十八日、稲荷社は千歳神社と改称することを許可され、大正十二年には小樽住吉神社から近藤義雄が迎えられ、千歳神社社司となった。翌十三年には社屋の改築がなされ、渡部栄蔵が神殿を、氏子が拝殿を寄進している。大正十五年には例祭日の変更があり、それまで春は四月八日、夏は八月二十五日であつたが、明治天皇が千歳に宿泊した記念の日である九月二日に変更の願い出を北海道庁に提出し、その後石狩支庁長から認可されている。現在でもこの例祭日の日程は同じである。昭和二年には神饌幣帛料供進指定願が認められ、これ以降は石狩支庁長が正式の衣冠束帯で例祭日に供進使として参拝することとなった。しかし初めて供進使の支庁長を迎えた際、適した社務所がなかったため、この時は渡部栄蔵の自宅を休息所とし、その後昭和三年に社務所を新築することとなった。

六 戦争と千歳神社

昭和に入り、時代が戦時体制へ歩んでいく中、千歳もその渦の中に巻き

込まれていた。千歳には飛行場があつたが、これは大正十五年に千歳村民によつて整地造成が行われ、同年十月、そこに小樽新聞社機が着陸したのが始まりである。その後、昭和九年、千歳で陸軍航空大演習が計画され、そのために村民総出で滑走路の抜根や整地などを行い、土地を五〇鈔に拡張、これを完成させた。

昭和十一年十月三日から五日までの三日間、石狩平野を中心にして第七師団と第八師団の攻防を中心とする陸軍特別大演習が行われた。この特別大演習を記念して、千歳神社の改築が工費七千円をかけて行われ、同年末完成した。その後、昭和十二年、村有地一三・一鈔の寄附を条件として海軍航空隊の基地が設置されることが決定し、急ピッチでその工事が進められ、同十四年に海軍の千歳基地は完成した。

千歳神社では、昭和十六年十二月八日の太平洋戦争開戦とともに、対米英宣戦布告や出征、戦死者の町葬など、戦時下の諸行事の祭場となることも多かった。

七 戦後の千歳神社

太平洋戦争が終わると、神社は国家や市町村の保護指導を離れて、千歳神社も郷社ではなくなった。神社本庁の管下に組み込まれ、ここから昭和二十一年に「千歳神社規則」の承認を得ている。昭和三十四年には、それまで宮司であつた近藤義雄の死去にともない、長男である棚宜近藤勝人が千歳神社宮司を被命した。そして昭和四十九年には新社殿の造営に着手し、翌年に完成、御霊代の遷座祭りが盛大に行われた。これは大正十三年に建てられた旧社殿の後方に位置し、旧社殿は解体された。

千歳神社の社殿面積は三〇七・九平方呎（九三・三坪）、境内面積は二万五九八平方呎（七八六・四坪）、境内の森林は千歳市指定の保



写真-3 現在の社殿



写真-4 旧社殿

存林となっている。
また、名誉宮司は近藤
勝人、宮司は近藤摩人、
権禰宜は小野芳徳、鈴
木泰尚である。⁽⁹⁾

八 おわりに

「地域と千歳神社」

千歳神社は地域と

もに歩んできた神社であった。開拓を進めるため北海道に移住・入殖した開拓民の団体は、その地域の結束を固めるため、また心の拠り所として地域に神社を必要とした。現在も残るそれらの神社のほとんどが無格社である。これらの神社の祭事は、千歳神社から神官が出向き執り行っている。

以上のように、現在の千歳神社は古く江戸時代から千歳に鎮座し、地域とともに歩いてきたと言える。明治の神仏分離令・廃仏毀釈、日清・日露や昭和の戦争など、様々な出来事を地域と共に経験してきた千歳神社を中心として、今日の千歳という街が作られてきたともいえるのではないだろうか。

(文中敬称略)

註

- (1) 千歳市 昭和四十四(一九六九)年 『千歳市史』七三二頁
- (2) 北海道 昭和十二(一九三七)年 『新撰北海道史―第五巻史料―』
- (3) 北海道 昭和四十四(一九六九)年 『新北海道史―第七巻史料―』
- (4) 現在の苫小牧市内にある。勇払場所の中心的漁場は千歳川であった。

- (5) 苫小牧市 昭和五十(一九七五)年 『苫小牧市史』上巻

- (6) 松浦武四郎著、高倉新一郎校訂・秋葉実解説 昭和五十七年

『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌―下―』 北海道出版企画センター

- (7) 吉田武三 昭和三十九(一九六四)年 『拾遺松浦武四郎』

- (8) 註(1)に同じ 七三三頁。

- (9) しかし、この預書では「弁天社」ではなく「厳島神社」となっている。弁天のままであると神仏分離にひっかかる恐れがあるため、この時期、各弁天社は厳島神社と名乗った。

- (10) 吉田武三 昭和四十六(一九七二)年 校注『三航蝦夷日誌―下巻―』

吉川弘文館

- (11) 恵庭市 昭和五十四(一九七九)年 『恵庭市史』一一一七頁

- (12) 新保清次郎は、釜加の自宅敷地内に御堂を造り、漁の時期に弁天を千歳神社から移していた。その後島松沢奥の新保沢(俗称)に牧場経営のために移転するまで厨子と共に守ったものであるという。転出する際、弁天は漁業の守り神であり、山には不必要であることから、釜加の人々が譲り受けて祀り、明治三十八年に釜加神社を建てる時に厨子とご神体の弁天をこれに納めたとされ、現在の拝殿は新保の弁天堂をそのまま移したものと伝えられている(千歳文化財保護協会 昭和六十一年七月 「釜加神社付近に史跡公園設置に関する要望書」)。本殿は昭和二十一年に千歳海軍航空隊神社の手水舎屋根を移したものである(註(1)に同じ七二八頁)。

- (13) 田中秀和 平成九(一九九七)年 『幕末維新期における宗教と地域社会』

清文堂

- (14) 苫小牧町 昭和十五(一九四〇)年 『苫小牧町史』一六九頁

- (15) 千歳町 昭和二十四(一九四九)年 『躍進千歳の姿』三三頁

- (16) 千歳神社調べ